

解 答

1

- (1) ① 築〔ける〕 ③ 永久 ⑦ 規模 ⑨ 試練
 (2) と述べた。 (3) 「いのちの体験」を通して生じた解決することのない根源的な問いかけ。
 (4) オ (5) ア (6) ア (7) ⑥ ウ ⑪ オ
 (8) a いのちの体験 b 悲しみや苦痛（不安や孤独感） c 共有
 d 自分のいのちの大切さ e 自己を肯定する気持ち
 (9) 「前」エ 「後」ウ
 (10) a 子ども時代 b 棚上げするコツ（棚上げすること） c 一人

2

- (1) イ (2) A イ B エ C カ D キ E エ
 (3) 1 エチケ〔ット〕 2 プロデ〔ユース〕 3 クライマ〔ックス〕
 (4) ④ ウ ⑨ ア (5) 沙也佳の手を引く
 (6) ⑧ 〔は〕にか〔んだ〕 ⑭ 〔がら〕んど〔う〕
 (7) 1 心 2 共 3 分 4 内 (8) ア オ (9) ア (10) オ
 (11) この町の風景の中で、親しくしてくれる沙也佳とともにすごす日々が、今の自分には大切であるということ。

3

- (1) ⑧ 察〔して〕 ⑩ 飼〔えない〕 (2) オ (3) イ
 (4) 〔押し〕あいへしあい (5) ③ ウ ⑤ オ (6) ウ (7) イ
 (8) バス代の代わりとなるものとしてのお礼のつもり
 (9) • 私と少年とが親しくなったこと。
 • 少年のところに犬がいなくなったこと。
 (10) いっしょに遊ばせてもらった
 (11) • 黒革のラン
 • それからも

解 説

1 出典は、近藤卓『死んだ金魚をトイレに流すな』。

- (2) 「これも『棚上げ』作業だった」とあるので、_____線部④の「『棚上げ』と呼んでいる」よりは後ろで、やはり「棚上げ」作業と呼んでいいような類似のことがらが書かれている文の後に入れる。そのようなものを探すと、「私は理科の実験室で…」の段落に書かれている、「『宇宙の果てに……恐怖』を……振り払った」こと。この後に「……これも『棚上げ』作業だったと思う」という脱文が入らなければ、次の段落の「そのときは一人だったじゃないか……という疑問を持つ人もいるだろう」という文と、「しかし」という逆接の接続詞でつながらない。
- (3) 「『なぜ生まれてきたのか……意味とは何か』といった」が「重い荷物」の内容だが、これらは例としてあげてあるものなので、それらをまとめて表現した言葉を探す。「重い荷物」という言葉が最初に出てくるのは五番目の段落で、第四・五段落から「その重い荷物」の「その」が指している内容、「いのちの体験」「解決することのない（=決して正解を得られることのない）」「根源的な問いかけ」などをおさえるとまとめられる。
- (4) 「」がつけられているのは「棚上げ」という言葉を強調するためであるが、「強調」という点ではどの選択肢も同じなので、「棚上げ」という言葉の意味について正しく述べられているものを選ぶようにする。「棚上げ」には、物を（網）棚に載せることという本来の意味のほかに、「難しい問題の解決や処理を一時的にやめること」という意味があるが、そのように意味をふまえている選択肢は
- (5) 「AはBとは異質のものである」という文は、AとBは見かけは似ているが、あるいは似たような言葉だが、内容・中味はまったく別のものである、というときに使う。つまり、「希望や期待」と似たような意味の言葉、「幼かった頃の無邪気な夢」が入るが、これらは内容的にはまったくちがうものだというのである。
- (6) 「何」が「自分という存在へのエールなのだ」といっているのか、つまり主語にあたる言葉をおさえること。主語は、前の文の「そこ（=重い荷物を「棚上げ」してしまったところ）で出合った希望や期待は」である。また、「エール」は、「（スポーツの試合などでの）応援の叫び声。声援。はげまし」のことであるが、この二点をふまえている選択肢はアしかない。「棚上げ」するは、(3)で考えたような「重い荷物」にあたるもので、エの「いのちの秘密を知りたい」という欲求ではない。また、「エール」は、ウの「喜び」やオの「安心感」という意味ではない。
- (8) 理由を説明した文から判断し、a・b・cには、「死の恐怖や孤独を克服」する（=「棚上げ」する）手段・方法が、dにはその結果「実感」できるものが、eには「生きる気力」を生み出すものが入るはず。『いのちの体験』を経験

し……悲しみや苦痛を共有し……たときに棚上げ作業が可能になる」「棚上げ作業ができたときに……自分のいのちの大切さを実感できる……自分を大切だと思う気持ち(=自己を肯定する気持ち)が生きる強さ(=生きる気力)につながっていく」と述べられていることを読み取る。

(9) 時間的に10歳の前と後、という意味。「前」を使った熟語のうちエの「仏前」は場所的に「仏の前」の意で、残りは時間的な「前」の意味。「後」を使った熟語では、ウの「後続」は場所的に「後ろに続く」の意で、他は時間的に「あと」の意味である。

〔2〕出典は、香坂直「青田わたる風」。

(1) 「去年の夏のおわりごろ……初めて見たバレエのことを……話していた」のはどこまでか、ということ。アはもちろんその話をしたときのことであり、ウはその半年後でのきごとである。イがバレエを見た話をしたときのことかその後のことか判断が難しいが、その前の沙也佳と香南の会話はあきらかにバレエを見たという話なので、イまでが香南が「思い出した」ことということ。ウ・エ・オはその半年後に沙也佳がバレエを始めるという話をしたときのこと。

(5) 「待ってー、待ってー……それが、いつの間に……。」の部分から読み取れるのは、いままでは香南が沙也佳をリードする立場、先導する立場で、沙也佳はいつも香南を頼り、香南の後をついてきた、ということ。そのことを十字以内でどう表現したらいいか、ということが問題であるが、すぐ後ろに「いつの間にか、私の手を離しても平気になっていたのだろうか」と、そして末尾近くに「わたし、沙也佳と手をつないでないと、まだうまく歩けない気がする」とあるのに着目すること。二人が一緒に行動することを「手をつなぐ」という言い方で表現している。すると、問題になっている部分は、香南の方がリードするという意味なので、「沙也佳の手を引く」という言い方になる。

(8) 「夏休みに入ってからの十日間……必死にみつめてすごしてきた。自分の未来と、未来につづく道を見失わないとめに」とあるのから言えるのは、ア。もう一つ、テレビの画面について、ふれているのは、画板と絵の具セットをもって迎えにきた沙也佳と話す場面の「ただじっと沙也佳の話を聞いていた。暗い画面をみつめるしかできなかった」と、「テレビの画面の中で沙也佳がうつむく」の二カ所であるが、テレビの暗い画面に映った沙也佳をみながら、「わたしにもみつけられるかな……わたしが行ける、いちばん先のところ、を」と考えていることから考えて、オ。

(9) 「偏差値の高い中学に行くことも、東京の大学に行くことも、わたしが手に入れたいものじゃない」とは、これまでの「自分の夢が色あせて見え」るようになったこと。「思いきり伸ばすことができない、頼りなげな手。声にならない、ちぎれそうな思い」から感じられるのは、「泣きたくなるような心細さ」である。イは「もう追いつけないとあきらめている」が、ウは「くやしさを感じている」が、エは「恥ずかしく思っている」が、オは「手に入れたいものが遠ざかっていく」がそれぞれ不適切。また、沙也佳の「おさなく頼りなげだったころが思い出され」(ウ)ているのは、この場面のことではない。

(10) 「ふわりとした笑み」は、アの「あえて明るくしよう」というようなわざとらしいものではない。「広瀬のことを見突然言わてあわてた」としたら、沙也佳は広瀬に好意をいだいているということになるので、イは不適切。ウは「広瀬のことを……理解に苦しむ」が、エは「香南は自分に注目していたのだと思い」が、それぞれ不適切。

(11) 「夏休みはたっぷり残っている」とは、つまり自分に親しくしてくれる沙也佳とこの町でごす日々がまだたっぷりあるということで、それを「よかった」と思うのは、そのことが香南にとって大切なものであるから。

〔3〕出典は、向田邦子『眠る杯』。

(2) 「その朝も、私は吊革にもプラ下がれず……人に押されながら」とあるのに注意。すき間もないくらいバスが混み合っている状況である。「乗り物の数も少な」ければ、一台あたりの乗客が多くなり、「厚着」をしていればいわゆる「着ぶくれラッシュ」の状態になる。

(3) イは「プラ下がれる」という可能動詞が活用した「プラ下がれ」の一部。他はすべて受け身の助動詞。

(5) ③は「漫画を読み終わらないうちにページをめくられたのだ」「漫画を少年に見せるようにして」と、⑤は「おしままで読み終えたところで」とあることから考える。

(6) 「二つ折りにした週刊誌」とあることから考える。筆者が読んでいるページのとなりのページは筆者の「向こう側」になり、前にいる少年の目の前にくるので、かれはそのページの漫画を読んでいたのである。

(7) 定期券を忘れて困っているのを見ぬかれたいたらだちが表れた表情である。「うなずいた」のであるから、ウの「うつとうしく思った」や、オの「認めたくなかった」は不適切。また、筆者が少年に何かをしたわけではないので、アの「弱みにつけこまれて」もまちがい。少年は、定期券を忘れたことをかくしていたわけではないので、エの「とうとうばれて」という言い方もふさわしくない。

(8) 筆者にもらったバス代の対価、あるいはお礼として少年にとって宝物だった赤鉛筆を差し出したのである。

(9) 初め「小さな声」だったのは、「はにかみ屋」の少年にとって慣れてない筆者と話すのがはずかしく照れくさかったからである。それが「大きな声」になったのは、何度か話すうちに筆者と少年が親しくなったから。また、この日に限って「大きな声で、『ベエ！』と叫び……小走りに行ってしまった」のは、犬が死んだからもわれていたかして、すでに少年のところにはいなくなつたため、その悲しい話題にふれられたくないので、先手を打ったのである。

(10) 「他人様の犬で」たとえばクンタでどうしたというのか読み取る。次の文の終わりに「いっしょに遊ばせてもらった」とある。

(11) 子どもってかわいいなあ、という筆者の思いが表れている文を探す。

